

溝上 慎一の教育論(動画チャンネル) No348

(新著の紹介)

現代日本ではなぜこんなに子育てがしんどいのか 神谷哲司先生（東北大学教育学研究科教授）

溝上 慎一 Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問
東京大学大学院教育学研究科 客員教授

<https://smizok.com/>
E-mail mizokami@toin.ac.jp

【プロフィール】1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、講師、准教授、2014年教授を経て2018年に桐蔭学園へ。桐蔭横浜大学学長（2020-2021年）。京都大学博士（教育学）。
*詳しくはスライド最後をご覧ください

※本動画チャンネルは溝上が個人的に作成・提供するものです。

※公益財団法人電通育英会の研究委託を受けて行われています。

※本動画では字幕を付けていませんので、必要な方は「設定」で「字幕オン」にしてご利用ください。

(ご紹介)



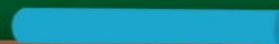
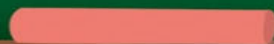
神谷哲司
かみや てつじ

東北大学 大学院教育学研究科・教授

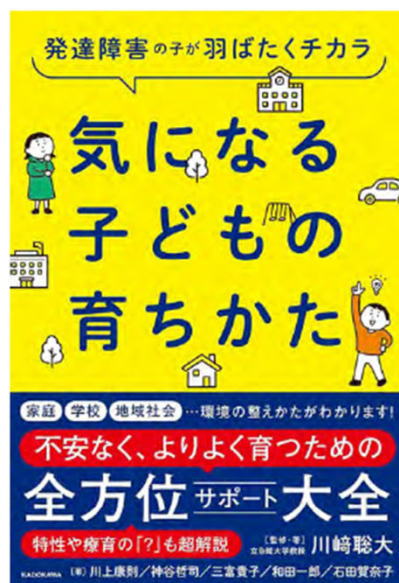
東北大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。いわき短期大学・鳥取大学地域学部・東北大学大学院教育学研究科准教授を経て2021年4月より現職。公認心理師，臨床発達心理士。

。

『発達障害の子が羽ばたくチカラ 気になる子どもの育ち方』（共著，KADOKAWA，2025年），『子ども家庭支援の心理学』（共編著，建帛社，2019年），『夫と妻の生涯発達心理学』（共編著，福村出版，2016年）など



新著紹介



川崎聡大（監修）川上康則・神谷哲司・
三富貴子・和田一郎・石田賀奈子（著）
『発達障害の子が羽ばたくチカラ 気になる
子どもの育ちかた』

KADOKAWA 2025年

- 序章：子どものことをもっと理解するには
- 第1章：発達障害って、いったいどんなもの？
- 第2章：家庭ではぐくむ子ども
- 第3章：学校で大きく育つ子どもたち
- 第4章：社会・地域との関わりを大事に
- 終章：発達障害を持つ子と保護者のために

それではご覧ください



溝上慎一の教育論 動画チャンネル

現代日本では、なぜ こんなに子育てがしんどいのか

神谷 哲司

kamiya@tohoku.ac.jp

@t_ks82

東北大学 大学院教育学研究科

新著紹介



川崎聡大（監修）川上康則・神谷哲司・
三富貴子・和田一郎・石田賀奈子（著）
『発達障害の子が羽ばたくチカラ 気になる
子どもの育ちかた』
KADOKAWA 2025年

序章：子どものことをもっと理解するには
第1章：発達障害って、いったいどんなもの？
第2章：家庭ではぐくむ子ども
第3章：学校で大きく育つ子どもたち
第4章：社会・地域との関わりを大事に
終章：発達障害を持つ子と保護者のために

第2章



- 一体なんのために子育てをしているの？
- 「気にならない子」なんていない
- 子どもの障害を受容すること
- どうして子育てはこんなにしんどいのか
- 親も親として育っていく
- 愛着障害ってなに？世にはびこる愛着言説のいろいろ
- 子どもの人的世界を広げる「コペアレンティング」
- 子育ての大きな悩み①子どもを預けるのは悪いこと？
- 子育ての大きな悩み②「スマホに子守をさせないで」は本当？
- しつけと主体性
- 子育ては難しいけれど……

レビュー

インタビュー

エッセイ・コラム

マンガ

特集

ランキング

トップ > レビュー > 何が違うかより、どう生きるか。第一線の研究者や現役教師が、発達障害を持つ子どもと親をあらゆる角度からサポート

何が違うかより、どう生きるか。第一線の研究者や現役教師が、発達障害を持つ子どもと親をあらゆる角度からサポート

暮らし

公開日：2025/4/11



『発達障害の子が羽ばたくチカラ 気になる子どもの育ちかた』(川崎聡大：監修・

昨今、いろいろな面で「気になる子ども」が増えている、と言われることが多いようだ。気になる子どもがすべて発達障害だというわけではないけれど、特性が強くなれば「かなり気になる子ども」になってしまうのも事実。

しかし、そんな子どもを含めて子育て自体を親だけで担うのはとても大変なことで、それが「子育てはつらい、大変」という認識になってしまうゆえんだろう。

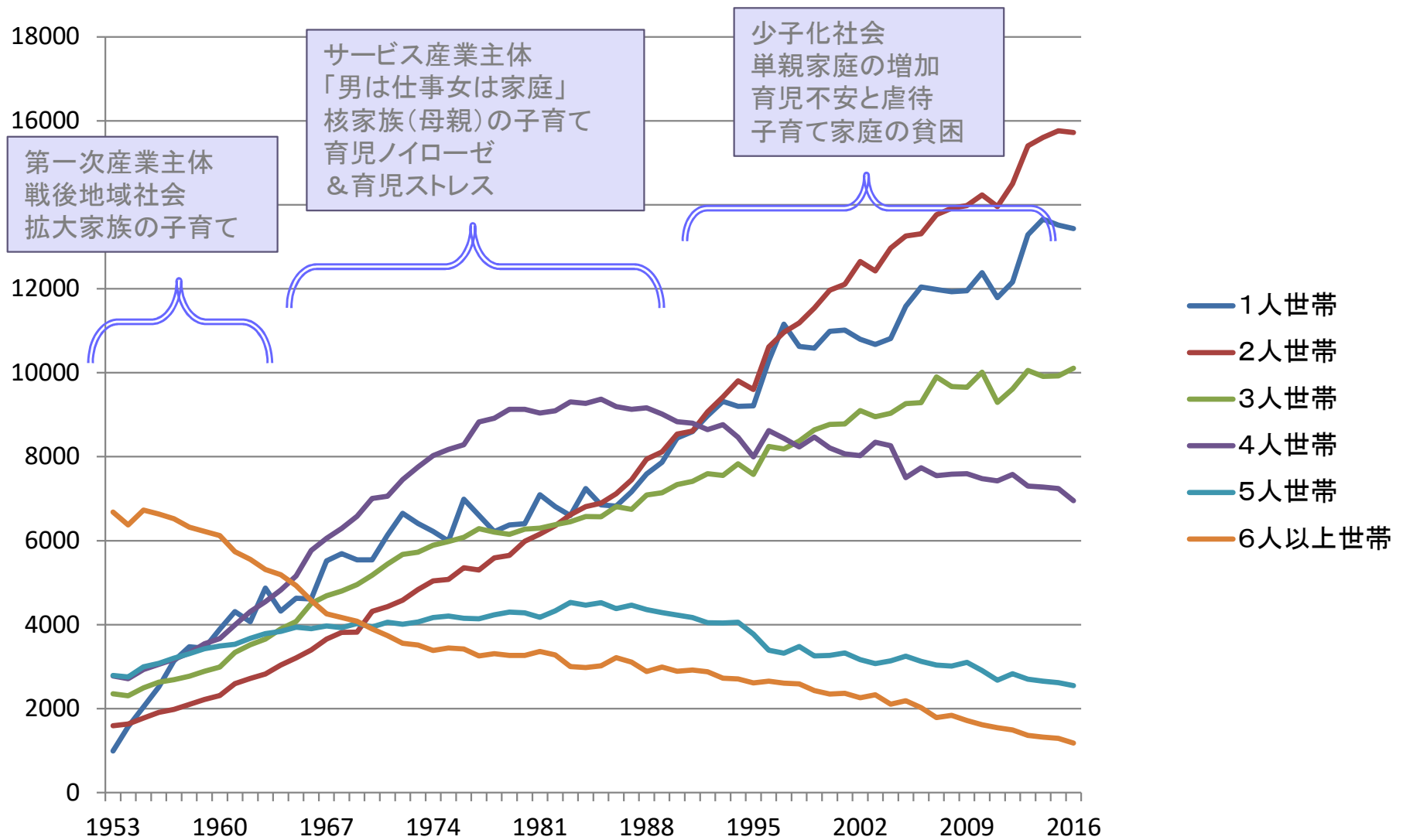
子育ては、学校や地域を含めて社会全体でサポートしていくべき。そんな方向性をしっかり示してくれるのが『[発達障害の子が羽ばたくチカラ 気になる子どもの育ちかた](#)』(川崎聡大：監修・著、川上康則、神谷哲司、三富貴子、和田一郎、石田賀奈子：著/KADOKAWA)だ。

「子どもの育ち」の生態学



子どもはさまざまな「人」の「間」で育ち「人間」になる

世帯数の変動と社会変動 (神谷,2019)



平成28年国民生活基礎調査より作成(単位:千世帯)

世帯人数から見た戦後日本の家族の変遷

- 第1期：地域社会における大家族子育ての時代
第1次産業下での相互扶助，子ども集団での育ち
- 第2期：高度経済成長下の「核家族化」の時代
三歳児神話浸透による母親だけの子育て，家族の個人化
- 第3期：家族の矮小化による子ども受難の時代
密室育児で育った世代が親になり，知識・スキルの不足

高度経済成長期における母性強調の背景

- 都市化(核家族)と職住分離

- ⇒性別役割分業の成立

- 「男は仕事，女は家庭」

- 「母よ家庭に帰れ」

- (1968年 保育所入所制限)

- 科学的知識の伝播

- ⇒「ホスピタリズム」や「母性剥奪」

- ⇒三歳児神話の定着

1990年代 新たな親性 (宮坂, 2000)



- 「子どもがかわいく思えない/愛せない」現象の一般化
- 「専門家」のアドバイスよりも、同じ母親同士で交わされる共感の声の方が励ましになっている。
- 1990年代の「児童虐待」への注目

「子育ては損か？」論争



- 「母親に全ての責任を押しつけるような世の中が重荷です。乳幼児や学童、及び子育て中の両親をもっと温かく見守る世の中になって欲しいとつくづく思う。子育てしている人が損をしていると感じる現状はおかしい」

臨時増刊 アエラNo.53
12/15号 (2000年)

まとめと課題

- かつては、「地域で子育て」が日常だった。
- 高度経済成長期に「母親だけ」の子育てとなり、同時に母親は悲鳴を上げ始めた。
- 高度経済成長期に「母親だけ」に育てられた子どもが、90年代以降「親」となり、子育て知識のないまま、子育てをしている状況。
- 一方、90年代以降の子育て世代の厳しい「経済状況」と自己責任論としての「親の責任」



現代的な課題としての「子育て環境」の構築

2010年代以降の子育て環境の変化と現状の把握

図書紹介



本郷一夫・神谷哲司(編)
2019年2月

『シードブック
子ども家庭支援の心理学』

建帛社



神谷哲司 (2023).

「地域みんなで子育て」とい
う難題 —母性神話・家族原
理主義からの脱却—.

『世界』, 974(2023年10
月号), 岩波書店.

pp.225-232.